



能譜一葉集附合之部四

古學庵佛号
幻窓湖中
坎窩久藏
編
校

元禄五壬申

其多也餅工等する様の先
りそ去とる一屋の所とる
善父入ハ只義入とて尺さくけ
りくさみふりり帯一持こ
むく物有款くく写しあ
ゆくと吹ぬき海のなまれら
考
編
考

烏
 妻の唇すくくつ村れきき
 甚ふれ可なりとあさきあしひ
 くさくさしとさする物をみちやる
 瓦うすたはれたる朱 純
 二三季迄のハ寄れはそく
 契ととや——く尺ちうく
 守あうそけけつけるさきの月
 蝶おるきぬハ角力丸の帯
 今更の田一池くやう原の筆さきて
 夜明けの星のまきこひし川けり
 法師の筆陰命も花うる
 白のほろ——と紅の飛入
 翁、者、翁、者、翁、者、翁、者

二
 陽の傘をさす側もえりう
 手紙と持て人の名を 司
 本籍、おれハ村の（が）さう
 善をとらけ——と熱をつとて
 ね風のすん——と吹おまこ
 ねふらゆくと告ぐ門 翁
 湯ハあはやしと朱らるま水新
 馬一匹より篇とまを阿のり
 小洞市の対うらなる赤上人
 痛、あけきい女あとりもり
 起こりて清い月の入りり
 阿の枝う枝枝の 是
 翁、翁、翁、翁、翁、翁、翁、翁

二の丸のまうくやくき屏風
向もあうくして舟人の節の
さししと藤原の念を喰ひぬ
口上りして之のうき若堂
足并の節のさうくは吹抜ひ
き片を越してのひきま枝

まきや小館のうきむ二段
極とすささる岸のかり
又知らるしきうそはもえか
刀の柄うらうらう枝

湖風

念傍の枝を伴うく舟の月
屋の柳しおのき友とら
小橋うきあは木橋のたせし
松一文うき枝をうらう花
菊弱の色は是を改びぬ
あうの末を辰の歳捨
尺の節のうき舟のうき
古くすうらうとる飯を
ちきうしては砂坊を何く原
花を焚くはうき喰ひぬ
月影の向の佛の甚き
めきう人深うきうの節

利牛
沾蓬

翁

桃隣

風
翁
牛
善
菅良
花
俗
牛
隙
翁
翁

智掛の峰のうら花のや
うふも時百の葉おみ

良風

あのみち 枕と横や字の餅
菊のふれし 葉の火
那解きの火 礎のゆるり
山の阿ふの 隆のゆき
糸の平有毛の 菊のゆるり
風ひや ゆるり くれし
傍事にお撲のおめり
帯ふところ 金のゆるり

菊 其角 風雪 菊 角 雪 菊 角 雪

菊のさくら 初微露の 南世大空
豆のふれし 葉の青さの 菊の
海さくら 枝のゆるり 火の光る
刺やと ゆるり 志の紅葉
すけ平功を引く 菊の
ふれし 心のゆるり 菊のゆるり
尺のゆるり 火のゆるり 遠入力の友
虎のゆるり 火のゆるり 小房麻
一通り 心のゆるり 志のゆるり
白のゆるり 火のゆるり 菊のゆるり
暖のゆるり 火のゆるり 菊のゆるり
お殿のゆるり 火のゆるり 菊のゆるり

菊 角 雪 菊 角 雪 菊 角 雪 菊 角 雪

船を浪よこしし柳のたて
 堤灯たゆり町の人
 女房ふみ米屋の事まじりやまじ
 高田の宮講をやむし
 くらきふ一舟の縁ふ枝をかし
 るし多に然の石草くすま
 牛の子はあやうせううく市の中
 江の橋の田舎階尺
 とのうらと夜に入力ゆり流子
 いろことゆくと略のゆきん
 頼しち子四子お草の素の素
 十人すしとゆひる方一見身

角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空

一ふひはに戸を尺しとる小言ひ
 みくくく一返して神の門あ
 紫よと未末を柳一むけ
 三人笑ふ妻のむくく

空 角 空 角 空

芭蕉庵舎

風林のまじり成りや射多
 旅の草鞋しりの赤の空
 砂川にひくく又答めかふふく
 門らうひする醫者の森おさ
 月の夜をえしぬかも喜し
 志ろふ瓜瓜とくハすし

涼葉
 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空

唐妻娘のよもを物とよむる冬の水
ぬるみらひのいととる心陸尺
まのめまう人もとくしむ契りし
そるもあつらひの字片を去
り替を痛し新をもかくし合
木賃の海へハ不致をよする
入るけも細ふ言此の節の月
塔をいあていふ言ふ人
こわろふと隣を白を扱かぬ
小船の文を送る村
時花手にお古海やとめけむ
寺のくれ本をよめるすき水

然水 水 嵐 紫 翁 怒 誰 良 山 妙 子 榮 然

人物も田路をいさして牛 荒
かゝるもきけハ念念を果
長くぬ契人冬に受て
あつた寺をいしてはは苦し
火桶すゝぬぬ瓶の音も清砂
昔妻の粉ふりし聖の振 翁
返りてぬ手紙ハ掃て捨ぬらん
おとけと魚ハ夫のおおしよふ
昔妻の手紙をいし付らぬお砂
先日知らぬ秋のよとれ
柿足女の宿まをいしつ居の月
編りつれて小舟のこむ

紫 空 山 空 子 榮 聖 紫 然 良 翁 山

狗の尾尻さけくろ旗の重
確珠の若子孫の河
心ふくしうろよ中をされ
きけんをし酒中さき
やふやふしおさし返す世の言
弟をさふふ人子怖る
良子然禁榮

物つちわ夜をひきりし虫の色
おのこれくと垣切り止
外はさしすめり月をさし
廊のいひましゆくす板の
史邦
沽圃
菊
真可

さやうこ子酒の息子の習をきて
桑丸をきく川上の山
ころくくと形のやうき石拾ふ
さきりゆれはたの麦を
雨さうふりく咲く花のむ
祖父のゆり葉子あつと
子ゆりぬ食を種をまき
経るまかくる事この家
ぎししとさふはさの葉の
尺をさしとさめなるあつ
張指を戸塚の木の傳る
後殺病のさやうさのち
沽圃可飲
菊可飲
真可飲
史邦可飲
史邦可飲
史邦可飲
史邦可飲

才人すゝと苗代先くむ花の色
 光るくさくさくぬ停憩のまの
 去る風と吹きわたるうき世の
 質よりふりて百あめ家
 以る所く獲る魚と化糖一
 蕙——くさくさ——白雲
 蝶去厭解あきまはる種
 并當 匠とくまの居心
 うみより休後十宿をまてし
 名古昔くさくさく魚載の
 悴くさくさみちの松の
 秋をぬくさくさく月蝕

可 翁 可 翁 可 翁 可 翁 可 翁

お志とぬの上さくぬの志
 おくさくさくさくさくさく
 物りくさくさくさくさく
 えと小物さくさくさくさく
 向海くさくさくさくさく
 復くさくさくさくさくさく
 塩ぬくさくさくさくさく
 奈良くさくさくさくさく

可 翁 可 翁 可 翁 可 翁 可 翁

物一外を稿のことぐ賃
 翁 翁 翁 翁 翁 翁

史邦

挽くし去休材木の行ねもひ
 よろこびそそれぬ中ハ生 登
 山を舟と流し去る女有の音
 昔のをやらして時のおりた心
 柳子 柳子 柳子 柳子 柳子
 降子 降子 降子 降子 降子
 如南 如南 如南 如南 如南
 二秋 二秋 二秋 二秋 二秋
 春 春 春 春 春
 百時 やすむ苗代の心戸
 菊 水 秋 水 菊 秋 水 菊 秋 水

草庵懐故人

名月や海に雨のくれを待 濁子
 空より松のくぬ虫の音 菊
 秋を経し海にささる石の色 千川
 昔のふりあれ海のくさるこ 涼葉
 端々ぬ鼻残すふとこころ 此筋
 ぬれハ坂のふりえさ 子
 猫人の矢矢のけしと手を振て 菊
 青ふおらうきぬちんちんく 川
 入口に澄みゆくれとよのむこ 筋
 きりさひ齋の鈴板をとく 子
 舟こそく接くハいつくみすくみ 紫
 柳こそくあすハいつくみすくみ 川

花かよわかやとんし〜さるさよの
ほろよや舟渡ものほろ〜わら船
昔風の古鼓のゆる船屋
春はあ〜す伊丹花白
琉球の砂市尋のおも〜物
是はは〜際ハ〜けん物役
え〜〜色付あ〜一本屋の
嫁入する〜〜や写子
袖ぬ〜す海怪子の巻こ
月〜〜〜き器油の箱
昔赤き百石石門の
ろろ〜〜〜〜〜の坊方
箱 茶 水 箱 茶 箱 茶 箱 茶 箱 茶

か〜〜〜〜〜〜〜
尺〜〜〜〜〜〜
出店〜〜〜〜〜
干物法〜〜〜
手拭〜〜〜
結露〜〜〜
人つ〜〜〜
夢〜〜〜
箱 茶 水 箱 茶 箱 茶 箱 茶

美く〜〜〜
提〜お〜〜秋の
箱 茶 水 箱 茶

小竹の内伐かゝる幼岸
船も寄れぬと月待の意
橋より舟より涙のらさき
舟といふわく三方の鬘斗
花の月射来す瑞防くん
澄より舟のつらさ 去来

高 跡 志 力 野 往 来

十月五日許六亭無り

夕暮より人々もいそいそと
舟に仕付しる麦のゆき
油言をも言ん小粒の味
汁のみこころ秋の風とれ

箱 許六 酒堂 谷水

高の月おく入行と古亭
先工丈する故帳の物や
才計の傍寄中も惚れ
鏡こりしころ小泣くも
糠つむまきの葉もさ
振礎そのほろ素らぬ入
木分ハ澄のぬ人もあや
船物のけし梢の音飽
舟言もさゆりし秋の音
八月ハ船もいそいそと
焼山くさの赤さけ

葉 水 六 葉 水 六 葉 水 六 葉

少輩すをけも花の本もけし
片も長馬の鞍の卵も
去深く遠志の宿夫の山も
高麻魚を漁り破す
さつとと鯉一布子手書
歌名も長持の上
燈火の影めつゝ一き甲侍
山もきん山もわつ
吹をき手魚のき焼ゆ
尾目子かよふみすの女房
いりやれ志も去つて
野道をうらまへし出るのり

水 翁 六 壺 水 翁 六 壺 水 翁 六 壺 水 翁 六 壺

その山を昇つて山をのり
舌のよも如旅良
一すちもまよふ葉のまよふ
藤子もいふ葉根の坂
宗長のうね寸白と子の法
葉もすゝまむ百姓の家
七のまもるる廻る神系
七十の葉のまよふ

水 翁 六 壺 水 翁 六 壺 水 翁 六 壺 水 翁 六 壺

六亭無行

二日ゆり一宗澄の宮意系一斗
宋玉外二戸八亭三の仕合

了士をかりて悉くしきし戸のそと
 月夜に髪を洗ふとみか
 火とくしと石のくま子供を
 先續可くる年の物 朱
 一つ十と門の尾子重海に
 言観方子か崎をえり
 くらやの字阿村をえ連立
 赤川の捨子流まかくし
 一垣子木をみゆの堀の内
 日ハ赤くわる二月 菊
 初花子侍者の蛇の糸をえり
 柏村よりやく字川の 上

書 六 景 六 堂 菊 景 六 堂 菊 景 六 堂

支梁亭口切

口きくに堺の庭をみる
 竿尺とよ美のそと 菊
 山雀のまじり強くおまじり
 秋の陣のさくし 菊
 旅人の新の月のめくし
 大戸を明けらむ 裸 菊
 鶴の玉子の良を青 菊
 河のくま子 梅を流初 菊
 みくま子と田の物 菊
 うけ業をえくお豆の 菊

菊 支梁 嵐 利合 酒堂 松水 相実 也竹 菊

こぼるる雨もきほつて城の羽
檻ふくくつ古坊の楳
とくくと残るしる石の上
酒し乞食のふややすき月
夕雲の長門玉を秋ま
あやうし朽けむ一徳の清
あや入花を虎の百半床
崖の二塔のたてはけのゆく
朝をハキキの以柳の思たれて
先子やささし釋迦堂の音
咲初し去のふもよくと猿
まの涙の枇杷のうすい石

合堂水葉堂梁竹案合堂茶

九界とて強きとあふ旅のた
きよけけしは遠きをたつ社家町
あさうらに鶴をあつをう
みよしゆの房此あふ川に
あははの綿の帯子肩守し
らん黄んをうら門あめ坂
はたふの物着し吹ふ雪の月
上毛吹くまらなるの響
谷傳ひあし可けなる竹代
方刀持けらう二こらあふ
物言ふすこれ勢におる一
巻子かきく丸筆のあ

案竹堂合案梁竹案合案

花さく 伊室の河の人通す
まよと 菜のわの吹を 瑞し
執筆 之矣

十十
九

木くろくはくめ 官をた入はゆ
荊口

毛をひく 鴨の皮のすく ちち板
酒堂

掛乞の中 松をく ちちく ちちく
翁

梨の枝 おもく ちちぬハ ちちの月
此筋 左柳

柳のいろく ちちく ちちく ちちく
大舟

秋の風 ちちく ちちく ちちく
千川

菊のこく ちちく ちちく ちちく
翁

六有のり ちちく ちちく ちちく
翁

ちちぬの 入く ちちく ちちく ちちく
板 壺

紫の雲 ちちく ちちく ちちく ちちく
翁

箕の向の 流れ ちちく ちちく ちちく
川 翁

鏡のちの ちちく ちちく ちちく ちちく
舟 壺

俵のちの ちちく ちちく ちちく ちちく
壺 翁

月代のちの ちちく ちちく ちちく ちちく
川 壺

ちちく ちちく ちちく ちちく ちちく
翁

ちちく ちちく ちちく ちちく ちちく
翁

ちちく ちちく ちちく ちちく ちちく
翁

ちちく ちちく ちちく ちちく ちちく
翁

十十
九

ありよしぬハ強きおそくそ
 白頭さしうすし芦 藪 じ
 中級の破れ切のうす棒さけし
 内ハ御子皆拾うし
 鳩吹ハ板の宮にさしと
 板のほうに急ぎさぬる
 ずれ戸子袖はあふの袖
 果ハこれし 摺子の時
 泣やして土窓 少るふの物
 師念法し 強念を 立
 門 (平响のかさり) 紙破るを
 むしろ少むれとくす 陸 福

瓦峰
 藪
 酒堂
 鳴
 翁
 里東
 翁
 鳴
 東
 翁
 鳴
 東
 翁
 鳴

三十一

山けをちれやわらわの尿
 梨地あけお火のさけ 翁
 名月とや舟の楫此一ささけ
 一の米を宵かふとくお
 花千本し家名を佛法お
 妻ハかきくぬ三梅の人 翁
 陽光の庭千探る 杖おく
 多しお衣子 昔 翁 折をく
 きんこい子娘ハ存の物おし
 志のゆを丸を足し 和 翁 狗
 珠代のゆをききし 田ハ 翁 鶴
 及徳ハ侍吹して 翁 秋 風

翁
 東
 翁
 鳴
 東
 翁
 鳴
 東
 翁
 鳴
 東
 翁
 鳴

三十二

二張の反紙尺一すく枕一
はめふの猫の尻をひきぬ末の
おのゝやえつこさし也嫁の息
現は度とをえやせつこ
夜の雨のまのこもあくさかむ
三寸の紙つを志しむ 啓
まいしつと噴をそわつ鈴の月
おろつあつおあつ友を秋の夜
さみみ水もゆけつ窓戸植
山さゆのこつこしつらハ新し
舂つつ可つつ合歡の二言

山 隙 崇 角 隙 角 崇 杏 山 角

かけむの探るの床のいふれし
おのゝぬ船子屋の以侍
暮るやと骨洞家の空つら
真つと暮るついこつ多を焼
尺ぬさつりのま人の志をわねつ
すこつ半分かつこつあつこさ
現つと半星を皎つ秋の月
おのゝはめぬのあつ後を
おのゝも近江流つと八幡山
息あつれつとこつこつ
おのゝ八幡道つとおのゝ
おのゝ名あつとつおのゝ楊を妃

山 杏 崇 角 隙 角 崇 杏 山

庭の子に花を在り瓜のかさうして
翁

許六

室の隙とゆへや活大相
翁

風葉

月とあふ音うらまを述べて来り

酒堂

寺より花をり桐の花をむ

素堂

猿子のをとらず野鳥のこゝろし

翁

よの中をいそぎしうかたうら

甚角

小誓情けしあふらん香の香

漢石

流中をうらに候のあふもの

翁

物きさうの終のひよあうて

普船

等船をいそぎ遠く市の中

盤子

いしと白油と出湯の新水

史邦

竹槍の葉うらまふ月の香

去来

袖すうらまふ子給のおれ

又草

元禄六夜酒

涼葉

池の香うら河縁の猿と志る美葉は

また美葉はけしきくぬあ
千川

川香の病鳥うらまふ月を尺して
翁

うさあふゆるお裁の柳
 秋風もむらさきもさきも
 虫も向秋ハ目もあつらふ
 机重く瘧の方をこらふ
 多中平 暮夜けし悔めり
 尾古の志尼ハひとり髪剃る
 奈良ハむらさきの中より
 掛るる小細の煙をもし
 金の巻扇をも望のあくさみ
 尺の度と源也一歌の志の何く
 於てふふきとやさむ信正
 出来合く信整の料理を廉おろし

宗波 此篇 子 繁 川 節 為 波 繁 川 節 為

三十五

ぐしして所く肉の砂
 物有る花の糸物せりき
 ぬけの扇れ糸はきく
 石をむき花のたぐのま
 地元の板子尺ゆつ名苗字
 夏さしハとらぬ麻のまを
 寺のいりえハ四五反の秋
 夕有る板木はりかす塀の破
 尺よみ飛を返すま
 先くあられ古儀敷の一徳手
 是しあつらうらう幣子の平
 へつ子あしあさき一歳の葉の

川 節 為 葉 左 柳 川 葉 節 為 葉 川 節 為

三十六

けりしと和の浦の初
 秋とや外ははるけし
 清波とくす子の影
 在和とくす子の影
 秋の襟をさくふ麻
 志の志とくす子の影
 以干干わくをさく
 智卑の一人、和を
 先手振るふれとく
 丸はすくすの鏡の
 鏡をさく母の足とく

良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫

木橋とくす子の影
 足場とくす子の影
 麻和とくす子の影
 念仏とくす子の影
 四五とくす子の影
 義かけとくす子の影
 男とくす子の影
 宿入とくす子の影
 切株とくす子の影
 湯火とくす子の影

良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫
 良子牛坡紫

糸と小巻のつらりと遊
 ねえとろをも黄ひじ中戸さし祝文
 却りの紫羅くハ若くやむ
 市原千とそんらと外くきや
 神おんする夜く号しと以
 月けり小岸仲官のさそい巻
 昔の巻の打ち多きをむかふる肌寄
 ちくくしと桐の葉落る手あは
 土付り何と巻の結帯古々
 水とくふおこされと髪振り
 猫可愛りる人そ丁いしと
 河のちと花ぬ工丈の河あしとハ
 掃月のとくいるくハ
 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱

八九百ちり雨降柳可難
 喜の物れさしけりる有
 初宿しと下士とあまの羽折る
 肉をよまつく喚ゆ振あ
 きりふくくおるる月のつら
 狗背のれし肌寄りあ
 志小林くしと風とあけり
 除く法とる祖父の信
 狼子とくしけりる旅
 箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡

三十一
 九

そのいと大入りなすくふもの
花はくちやあまのふらふら
流しらのなる場所の水

里 黄 沾

深川にまきくし

孤屋

空豆の花はくちくち麦の露
屋のまきくしのけい川
上張を通るぬれまの雨
そのいとあけの海の家
中
雨あまのけしあまの月
まきくしとあまのこま秋風
まきくしとあまのこま秋風

菊 盛水 利牛 牛 屋 菊

吹の仕より此工更す
妹とよみあまのこま秋風
信おのけくえあまのこま秋風
風不きくちあまのこま秋風
家のおまのこま秋風
福汁あまのこま秋風
茶のこまのこま秋風
此まのこまのこま秋風
可れしあまのこま秋風
雪のけあまのこま秋風
あまのこまのこま秋風
不あまのこまのこま秋風

水 菊 屋 菊 牛 屋 菊 水 菊 水 菊 牛 屋 菊 水

夕つら切をよくめくす
 位等のしそくもあしあふ
 雲わすれくさるを尋る
 急のおしこすらんてふか汗を
 空を遠くさける智基
 くの空を空の跡のさきさき
 手首 編こくとおれく
 息災 祖父の白髪のためしよ
 堪 思ふくぬ七々の思
 名月の空を合やぶる芋島
 すこくくくくくくくく
 けくくくくくくくくく

牛 瓦 翁 牛 水 翁 屋 水 牛 瓦 翁 牛

山の根際を証うすく
 積りゆくまのし風の吹あふ
 きくくくくくくくくく
 心 尺も女子はくくくく
 よの空をくすくくくく

水 翁 牛 屋 水

十三夜 曉やまはけし
 小袖の袖のこころを尋る
 焼飯 干皮の粉漬はあけて
 仕 故麻のかくくくく
 高 幸付の干皮の志めく

濁子
 曾良
 翁
 史邦
 秋風

こみくふ流し風をのまや
きり麦をたや物新くあまて
孝子をもゆけ八雲橋の舟
松林をたそし橋のちの門
ひとくやも是のあのこと
負はれあをもとほきぬ是を
涙をくはる心杯 夢のこ
うす月夜麻の衣の影あし
言わぬ言ふ葉のころ 秋
まはるも打りけしる秋宜の家
登りあふふは是の味 積
先汗と星をぬくころあ

水成 原葉 子良 水子 菊 子 菊 子 菊 子 菊 子

しうひやう輝し秋のあま
秋さあも指をくころ一草切
中よくあま見り縁 元
具足もを信りし作し坊のつ
顔くは似きぬ縁 原のあ
妻ある陰居の牡丹んし帰る
禱をくくくくむるをくれ子
まはるん系の近きうまのあ
ゆはむくして何ふけり
よふれたる名を梅窓のあま
伯母の泣く 雨人かうけ
ふの月夜花の梨の種うけ

水成 原葉 子良 水子 菊 子 菊 子 菊 子 菊 子

うらみとてや琴の如く
あふり十とて色も花さく
瓜をまきつる稲のほろ物
手紙を津波の石人の河
志保しうられハ凡そかく
持付ぬお古刀を右平がこり
ふれハさぬさうさめさ
之川さちや音の涙を踏ら
是祖のや一らなを尺
家立をよ木の芽を積まね
厚く大さくさくけゆく
雨心の姿似たり水う
子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉

大原の紺屋里千久き
数おなくつまけハ牛と雷も
舟のみあそに鯉も
初叶雨の里の杉を傳ひ来
むり子雞のソウめけさ
おこも水鏡の起すおさめ
笋ゆすすみのまの
まあハ雲舟のくまの山
ま風さすす谷の細布
子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉

秋月廿二日
撫子村原の如く
福

時しハやみみ咄由する杆
高匠の極の小節を扱可ぬ
行をけ山子由を見り外
好物の餅を強さぬ秋の風
ろく木の安玉の象 雲
洞のよのを法舟にありけ
星さくろく二八八
ひくくハ殊子軍の大小し
淡雪の雪子鏡流もさぬ
的くむ智批灯を吹けく
肩癒くたる湯屋の言有果
上至の干菜きさむくハハ

野坡 狐屋 利牛 坡 牛 屋 坡 翁 牛 屋 坡 翁 牛 屋 坡

了りやぬりる内く急する
綿貫の七さくくを評しつれて
婿子一門ある五十石とく
此島の鯨鬼ともをすの内とを
砂子ぬくくはくつる書子
新畑の養々着つく香の上
吹くくれくる道とくくく
川くの帯くの水を河ふく
赤地のさくくすお敷 垣
干物を日向のさくくさく
塔あし鴨の苞 匠くく
舟用と浮きとる系 匠く

翁 牛 屋 坡 翁 牛 屋 坡 翁 牛 屋 坡 翁 牛 屋 坡

又河津のしるしあまの産ふ
やうとくとも大鷲をも四つのは
やまのふのむねの法先
中よくて傍家合の信けいひ
登とくきくしるゆきぬ夕月
風止る秋の酔ひ尾さうり
解の写子の魂をいりゆり
ちりけりしと末の揚場のけり
月暈ちありのまのぬらえんく
何おもかたの三月中時を
梅炭の産をこくふまは

牛 屋 坡 菊 屋 牛 菊 坡 牛 屋 坡

芽焼や解梅の田井の妙水
こまうしてきくしる子くむ解
職おる子指を延子けりけり
朽くすくむ葉の林の木
くす月夜子解にさうの醒く
遊らむ牛も足しぬ菊も方
まかまの山村の産をくき入
核のまき子けり信連純
あまの産去るれ梅のふにけり
塚ハの地子あけぬ石原
りまハ強子吸筒さけききて

菊 子
溜子
涼葉
菊 子
菊 子
菊 子
菊 子

和田秩父ともいふる名意
掛乞の事しハ詞をゆゑにけり
よそよとくくき月小枝お戸
虫よこしして就年の度れり
松もすききと念佛のいぬ
宿ハ於いのちありきむのけ
破籠ハさ久ぬくひすのち
雪よみききしるの法ふれり
白流つるアツ一帖の残
旅齋や長ぶ五月の和伯り
名跡をのさくあきさの度と
る竹ハ尺くぬ伯母と懐く

紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子

え米こころ酒の真 度
焼まして愈子饅する等の月
きくまくと和室ふゆ
よき聲ハ飯能ち更子歌ひ
くふみえ展のちえとる
よの結と折紙をのし流す
紫屋童をさし床のかこ隔
時多すしやとぬ帳を物うけ
ゆきよこしとむ折紙のち
了す雪の上子ゆれのこる
徳の庵もこましく是の
折花子子供のすくはる

紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子 紫 翁 子

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

さうお植うて作のま

坂の記をいふむ 香 矢
手よりそよはるは 杉の村の可し
住して海にむすし きのあ
きくし 松の風のゆるる香
猪めき人の 腹をゆるやる
月よりハ 親を不足のあま心
そよれて 家ハ 何ふく けし
飯に 刺して 煮るくくハ 深縁を
仕付し 病き 奪才の 言
田を 極む ちの 近江の 船の ちま
下 奪く ちり 一 宵の 祿 唱
此中道翁不適意句又故不満韻而

坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁

終云々

生ふくく 山に なる 生 海 鹿 丸
名けハ 白く 空 菊 の 菰
代古の 飯 俵 ちの ちの ちの ちの
在 風 花 桶 の 輪 を 八 子 子
酔の 指 を 持 けハ 潮 の 引 け け
くく ち 遊 して ち ち ち ち ち
親の 時 ち ち ち ち ち ち ち ち
中 一 ち ち ち ち ち ち ち ち
香 簾 の ち ち ち ち ち ち ち ち
旅 ち 物 の ち ち ち ち ち ち ち ち

水 翁 水 翁 水 翁 水 翁 水 翁

嗚へんて入るる羽折
親仁しとふれうき
月むの青うし仕せうを巨鼓
破冷しうし餅ハ破
涙あゆとくく(首の妻の風
門のたう)ハ尺 籠いささる
野の市子一却雨の陣(通う
菰く) 露籠をわすう 雉丸
鳥とふおおおきうハ知うさ
雲の 洞江の山さるま
入り松さるくハ竹 鹿
伴一歩を伴をうけすと

菟 翁 先 壺 翁 菟 壺 翁 菟 翁 菟

墨紅の小袖ハ襟のあうさ
異洲の系帯も受すわさ
あつ符の二階を居るす不
月を味す一癡癡をきく
紗の物の一帯見ゆさき
皆す破るる袖のきり取
秋の虫糸しつる旅功者
春加帳すつらぬあうさ
不乙儀しを山の新三位
回令の谷すあうさ

菟 翁 先 壺 翁 菟 壺 翁 菟 翁 菟

雪やらの雪のらるる夜中さし
刃の柄子わつよ 拭 霜
杖風

白くし木きりけりあけ
秋末てうらう 瑞雪の 境 然水
依

研いでけり 橋の 平判 霜
野水

白櫃の梢ハちん林干て
野水

焚ききりてよ 舟を けりて
水

焚ききり物尺のむしり押さく
良霜

出雲子物をきやり上りし
良城

初むハ巻指し いそがれ
依

堀のつゝ木干りていすの
執事

里圃

作圃

菊

馬寛

いそみえ 鷹引 けりし

大根のそとぬきり 若く
秋

上下とも干り 秋

何きうに月尺のたの葉め跡
荷うちくしと通る次
里 估

共角

まろれしやえ標きく懐しき
名際もゆつ陽谷の石
出代の荷物を手とりかき
箱

毛純

梅り魚や通るこれハラの音
出れ激しき在特る
陽谷の地物の牛の扱ぬけ
箱

木導

ま風や麦の中細くまの音
陽谷いさむ花は急
箱

利牛

長丁や音の扱るとニク
おろしやく籠子の細か
葉のまの葉のはあきう
箱

成水

野に口之圃さう母方ゆき
あふあふを平あふ仍て能号
をあふいさむ花をき
箱

法圃

籠あつて名をふのう人
宮極の扱
まろのあふ葉の戸を付了
箱

四十五

古将監の古守とて

月やその跡の木比りの

故人あられハ折りくの

あまの煙 又の村へ

葛 比叵 其角

雪の松折のそとれハ

のちのあはれあはれ

の春を一船信の打

万とまきくハ大

あまの風とふハ

粟をかききして

孤屋 子酒 桃露 利牛

箱

あまのふの大相若

一通くゆく木

あまの松折の跡

火とあまのそと

物の葉のすま

くハあまのそと

玄命 舟竹 箱

元禄七甲戌

梅うさのゆと

あまのそと

あまのそと

箱 野坡

上のふるり子あくる米の直
中身のうらほしき一月のま
敷く一撃す秋のまひき
おびく菊もくくく連意す
娘をかき人子ゆきぬ
素直通ひ回し清くあつめ暮
と一ハ雨の降ぬら月
紅く味舌あやや向川有
ひくくしむあやお袋の
まきくく尾の枝病をおきく
菊菊けくく残る名 月
初夜く糸掛ら地敷く尺く

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

あやきあや子居合一めお
何んのはくくく残る花のくけ
門し相さくく生れのま
くく風くく葉のまをくく
只片のまに膝くくく
江戸のあや向のまをくく
くくくくくくくくく
方くくく十夜くくく
桐の木言くく月さゆく
門まめしたくつて宿るま
拾くくくくくくくく
初午くく女府の親子採菊く

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

すのこち本をハ先身一しく
巡礼の得し旅の道のくま
兄より兄より信よ頼り
花足んと杏る急中の暖り
くくハ梅子さきるお娘
何しは海猫の首を忘はる
ちうあしきる民木の塔
湯より信衣干冑をすらう
壺の破れり入る如
さひさきる積り川をさきと来
老のちうの記ハ何所の
兼島幸貞の築りかろそ

川 遊糸 筋 板 紫 筋 山 筋 板

海屋の門をくく月の夜
人足の曇目引ゆお暮つこ
玉を引れそ美足ききり
早むくそ夕代さひ一死変
海あしきる雨さきく蝶の音
随分のかきす美並をつくる
火よりかきき一門の強物
院内より信川をよ波の
喉と手れしやまむまの
けまハ信より美と花のけ
埴のせいの足ゆつ苗代

紫 大舟 系 筋 板 舟 紫 川 系 代

感得むや敷を小庭のふすま
 よふ雨目千化つ糸 俵
 菊のこころのあつみ
 出雲のお子梅ふ起 し
 けんしるのさふさ書 柱
 楳あつけしよと又本る
 俵長して持こしぬ破さち
 けししつ信風のみ
 若葉し羽折後さし俵 枕
 ちんちん魚のあしあし記
 阿きあひと地ろと内の路ろと

子冊
 秋風
 桃味
 八葉
 翁

山のうささる下市の 里
 子冊のけしハ旅の幸あつし
 四の月とまきこさふ
 秋末ては鳥の去れしつれ
 雪夜の羽のこえ梅あち
 花しとさめさふ花生
 けしし山子かすし
 正月の末より張治め人麻の
 ぬれしる俵もこつしり取
 屋のほろろと酸のわつと
 五りあつたハ陽る女 翁
 此際と利上とろにのて

冊
 風
 素
 味
 翁
 冊
 風
 素
 味
 翁
 冊
 風
 素
 味
 翁

すんやもど約ハ頼そのくむ
能携れ青き汁子きう入
尺女よりたぐり家ハ引こむ
云りけりてし... 八さねを巻の月
すこい花もあふきき麦のそ
柴桑の葉とくつうとほりて
不くく本より人子とのい
いそくく一向指し供支
葉とむむひ陽きく
その宮と志と成はる海柑
口用の玉窓とを籠りて
庵は前が葉屋の花うさひ
小舟波起す此の山あり

海桑風珊菊葉海風珊菊葉海

瓶

除別

新麦ハくきとすぬそを
中にお故懐の世とくく
了付のこりきけしお枝の
四五ふ石の和りま
方と一醫者を引する
踊り地は法理とおわし
をこののたぐりて
けりくものり
道生とを止る可

山店 菊 店 菊 店 菊

物子もよやとさする夫目
花のうららけの世にふくむる
春の光をよる黒谷のそ

店、翁

多難の世に人の心もや作合偏
苗の香も舟もあけこむ
物風もむらふ命も吹まよ
大手の肉けけし生りの
さくやまの暖はるる月秋
と山もさくさくも標もあ
耕作もさくさくも神所し

翁
素賢
川翁
川翁

豆腐味もよや作合偏
尾馬の足も舟もあけこむ
雨の降りもさくさくも
蛇孫のりちも苦もむ城の所
菅もよや上り門もあけこむ
切妻のゆらけもさくさくも
お娘のまはれもさくさくも
うらやまも初め打もさくさくも
袖もよやさくさくも
咲もよや二橋もさくさくも
打もよやさくさくも

川翁
川翁
川翁
川翁
川翁

牛流す村のさくらふやま有海
 青葉吹ちの梅檀の花
 一板のむらぎの金鳥のたひて
 柄も小虎も古く結さし
 有彩の巻の生海龍のらり
 堤初らし小田の中は花
 紫くはあよ竹原の百よし
 お斎ハ月より十五を所
 秋く良くとおろしきや給ふ
 厚くは野のさやうまのた
 抱ゆし松原のらりまのゆ
 野明 然竹 末 支考 文草 惟然 吉来 瓶行

雨乞のまきうらふりに降却て
 彷彿をこころう根家のま
 植ふし庭のたきをよのくや
 春くきくあう浮世はより
 是もあふ高の岨の花さう
 半反を鏡まかむしる喉
 川舟の濁りうらふる存く
 堤よりたひらして清らし
 三つあふり筆原うて情あ
 茶外の雨のまきぬれ
 此涙の上のうらみは
 瓶 学 然 竹 末 学 考 文 草 惟 然 吉 来 瓶 行

梅子 杖さす 言の香建心
 ころ 薄くゆふらの飛の香くく
 ちくく ちくく ちくく ちくく
 斜の月起く ぼくく ぼくく 服
 分ふか ちくく ちくく ちくく
 菊生ふ ちくく ちくく ちくく 狼
 加減とせし ちくく ちくく ちくく 梅
 ちくく ちくく ちくく ちくく 入
 何とけく ちくく ちくく ちくく 弦
 吸物とせし ちくく ちくく ちくく ちくく
 肥後とせし ちくく ちくく ちくく ちくく
 いく ちくく ちくく ちくく ちくく
 ちくく ちくく ちくく ちくく ちくく

五十四

二月廿三日

賞とす ちくく ちくく ちくく 竹園子
 祀者とす ちくく ちくく ちくく ちくく
 善父入の ちくく ちくく ちくく ちくく
 又時 ちくく ちくく ちくく ちくく
 火焼き ちくく ちくく ちくく ちくく
 産心 ちくく ちくく ちくく ちくく
 旅人 ちくく ちくく ちくく ちくく
 春の ちくく ちくく ちくく ちくく
 下 ちくく ちくく ちくく ちくく

浪記

五十四

小庭しき葉の疎のうゝ河
 謂分のちんりしと起る花さうり
 梅咲そえして花さうりやくり
 手中を松の内より料理味
 伊東の松のいそしき葉
 上紺の木路合羽をかき指さ
 湯屋のちんりしハさうりし
 名月の松葉五子あくし合
 一分してあふ梨のきれいの
 玉味塩の候焼しうゝ秋の風
 不足ぬきをそりておす
 右のちの押ひ次中とけく葉

本 化 末 代 翁 本

点くけしやうお役の又
 此の柳をそりて通し能く能く
 春のうゝわうて又之の風
 春めあふ石をそりし水坊
 陰佐をききてる士り合さ
 月とくふ松の塔梅を星く尺
 柳葉柳ハさうりし霧 展
 志のふりも踏むと心さして
 春さうりしあふ花の傍
 春さうりしあふ花の傍
 春さうりしあふ花の傍
 春さうりしあふ花の傍

本 翁 化 末 代 本

五十一

五十一

五十二

五十二

四五人通し信長軍あり
新近河の子供の御首有能
いつともまじりて志すも世の中

化 菊 末

紫かられをうけかて瓜の黒く丸
中 松千 字のふりまゝの
分り御持手探の人の味一と
竹とお供のゆきひとよき
半時おの初よりうらるる月の入
火のくらしくと燃し良 亭
新にえきとひのほる華清の

吉来 浪化 菊 之道 文章 支考 惟然

兄弟とも、兄をゆりむつ
切きて鳥見まゝす丹波山
そらりし物よりおの愛物
赤合ハ鯨のよみぬきとく
赤くすけけし新煙のさや
ちくちくし風を吹て戸を敲
こそくしと我く黍の紫
砂川の清くふりつる夕月夜
お志しとれとも軒前よりつく
百もふ花の木さけの店屋物
そまゝね藤の面を足くす
はちすし櫻葉より足くす手の手

野童 野明 末 考 然 産 明 是 末 子

穢場のろろのおちりのくの来
 郭の内息をするをおとをやう
 餅つてやめけけけ什敷らう也や
 羽子板のまま一字に銘の印と
 備上ししくきあいりぬの
 藤小紋の結の十徳のすんんと
 子舟さらききと秋ハ本まま
 比又舟をぬらと山らら
 然らとけの写子かく片く
 角字つく片の底の体くと
 あら木らる市の小屋掛
 此らの代物をさし新すて
 是 明 量 無 有 学 来 是 明 堂 然 考

聲と男はあまる換抄
 お鳥の里いいハ御くみ
 途とまま物のかい入
 花のあは志とく止ぬ字述し
 白らぬ一とまの精くく
 此 然 翁 草

閏五月廿二日首柿舎記吟
 柳骨解にあはすし初吉素
 万引旗とる中の釋
 村雀里よりあまりきて
 帰りけりすまあ石垣
 月跡ら川あふく舟の端
 是 草 支 考 古 来 洒 堂 翁

五
 十
 八

小さいうらたて砂子思つく
上をきくそくはさそふきき
手桶を入るおぼろの法
赤も念ハハのまのそくえ
大工の物アキ踏をうは
牛糞のよ取掛の唐素の先
使くをまらして酢味噌をやる
海おしとまきこし雨のきこしと
地くやんきりしとるは足
お鮎を焼く鮎くあぶ子
くらとくさる櫛の木を素
月花子ららるる門をぬり入る

惟然
翁
末
然
翁
末
然
翁
末
然
翁

業おるす火の上の海板
湯をよめき付く器志の付
新のきのかさのぼろとて来る
口のくさるをまらと柄かして
運んをよめぬゆりの不端
くすむの一本ん庵の海くさる
清おハきんと次の田ふ
おいここの細を籠のふすき
味のめ屋ゆり吹き
幕礼の法して経よむ花心切
子ぬらひ脱ておるす牛の荷
川いとも渡てきよくゆり

翁
末
然
翁
末
然
翁
末
然
翁

吾方のたぐふる初瀬の晩鐘
花の鳥や啼ぬ鶯のいくむき
去留のうらう草多ぬのあは
帰るに田舎役者の荷の通る
伊勢に吐く料理先づら
栞の本をすらすと風の吹くる
尾と路とぬき空をほく
俣とをを空のゆく宵の月
きくしす花さや標の中
秋とくやいろくそく朱より
合点のゆるぬきのかし木
根をを枯く文を浮花を

川 始 星 行 川 星 始 行
夷 始 行 如 行 露 川 明 然 翁 明 然 翁 明

木子抱付ておく音 鹿
作山の写きて多ね華徳
の屋け島と上田の如木
夏の花をのり方きくる筆の香
荒くうらうてかひくりに
遠くれおのハみ渡の中てく言吹
此有末く 強了 標 炭
昔くく花より思ふの
くくハぬ春をすま

川 始 星 行 川 星 始 行
桃 子 行 始 星 行 川 星 始 行

みうけや夢と境をとらるる

有

村佛の鳥千々々さしこむ
手嘘千々々を舞之りあえこ伝
秋風ささるる川の尾風を
下葉て紙の細る月のりけ
尾強てつきしえの尾千々々
餅あひまののちとゆきとれ
正月のあゝもくもよこさす
去風の舞傳口はよりゆき
数くく村へ出けり素のそ
うひうひぬ舞も男もひきひ
向きの対る山に千々々
尾芭を捧ぐ付る枝 ち

翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫

こゝいこゝら卯月神のま
お而く伝先千々々矢木の所
伝の白の舞千々々の舞をひ
居る千々々をきぬ海に引き
君智の分をさすのりけり
射付し又葉末さる月のさ
そろくくくく魯の上葉 宿
法は花の四葉の角の何系所
言微をみくさおとし一固
今の下を捨をい流す指の上
大きな膝のとん千々々ゆ
まふり切ると尾おしよきて

翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫

橋りけは——高棚の下

の——と揚の扇や雪の峰

喜葉をちりちりくく夕立の約

流を流す舟を舟に足返す

くちれり家も他は——京中

月のあけの袖をきりきり来る

大方虫のふもをそらへ——峰

か——うさをもすわめて床の秋の雪

直——くつと物を思ひきり迷を待

箱

安世

支考

空芽

山就

丹野

身

翁

老

秋のゆらや——む海際

山——と心も付るまにれ——

去向の風を吹く吹く

能犯るむす子の居る縁の上

まろ——江戸の字外に来る

多山と山にいでて中息をきり

らつとよるゆら枝を——はく

月をを紀の言を——が——

あ——らけりとも猫さうり

石塔を大——とくさるる——

骨——け伸——ら悴きつら

こくめんれ伊方の家へ不斜管

路通

翁

牙

对

老

者

者

老

桶と鹽とあつてしき編
扱打もさう許し猫の近所さ
そり物をかふる掃除の
花畑ハ茶摘くちうる表の山
法ししの配る赤土の岸

然 翁 考 翁 然

松茸やしぬ本茶の皮さう付
秋の夕和ハ寂し加に中
宵の月河原の星を中江に
くしハきけハ里のうら
ゆ五人てあつては命能た走

翁
元代
支考
雪共
棟柱

いさうし物手籠をまじの
くおのむを許さうしハ
屏風しんし掃屋さうこ
らんし上州米のえささう
まうまのふもさうの合さう
荒ゆくふと人の上の毒味さう
風やまをさうハさう
いさうしき物もさうし
三年さうと嫁さうのさう
難の志ありふハ人さう
きさうしとさうぬ紅あつく
初むの頃や古林 結也

望翠
惟然
卓袋
代
考
甚
程
翠
翁
袋
萩子
然

是るゝとふぬ月の縁
 けしとて鏡子こころの想おもひ
 麻あの苦くくくとと豆ま敷ぢ屋やののり
 手切てのちのいいままののああのの角かくをを入い
 居い風かぜのの湯ゆののめめ加か減げんととふ
 二三二三本本中中伐たれれかかんんくくと
 おおのの燈とう籠かご並ならぶぶ小こ屋や
 破やぶれれてて枕まくらのの響ひびききのの弱じやく
 花はなききのの一ひとつつけけのの一ひとつつけけ
 味あじ味あじのの音ねのの音ねのの音ねのの音ね
 木き綿わたをを簾すだ子こににははくくととふふととふふ
 之このゆゆにに本ほん家かのの物ものもも搗うたたれれるる

然しか代だい芝し能ね菊く者者子こ能ね者者代だい

花はなををええくくけけのの足あしのの湯ゆのの湯ゆのの湯ゆ
 此この秋あきハハ暁あきのの光ひかりをを照あららわわてて
 信しんとと倍ばいととのの守まもりりのの守まもりり
 呵あのの信しんとと倍ばいととのの守まもりりのの守まもりり
 芝しききのの入いりりのの入いりりのの入いりり
 花はなををええくくけけのの足あしのの湯ゆのの湯ゆのの湯ゆ
 昔むかしのの南みなみのの南みなみのの南みなみのの南みなみ

子こ霜しも翠すい葉え芝し能ね者者子こ能ね者者代だい

七月廿八日猿轡亭在席

物ものののかかののかかののかかののかか
 物ものののかかののかかののかかののかか

猿さる轡わづら配はい力ちから

六十一

葦のうしろの之塚の麓の
うのうと揚をふるう勢の取
きくうにさうに橋の
橋基のちいさなうさうやま
名主と地元の之ころの
焼倉を割てと中の冷くて
おまの居てもぬえくうう
此ころ八幡の安きころい
物あのがまてうめをえま
根まのふ尾のまをぬえ
角カウカけていふころ
山くけの山依村の一角

望翠
去芳
貞袋
翁
松
翠
芳
袋
木白
力
翁

うりとうろく
焼きして紫とくまの底の赤
去らふさうまの風まら
標刺の川原の石流をゆけ
白菊しききくみさ
天名の竹の長さの果と
命の噂のちころ血の
一井を伐さうまぬ酒の
響のうしろあしは
御火子草屋の細子の
龍力草此相
帯木をぬめさう

袋
芳
翁
翠
白
力
翁
翠
芳
力
翁

寄書 物をよきと 性子の旅
之おろくみ 去しとく 尼寺の端
殊 持まよし 祖母の信 こと
言ぬ 花の木 けの 一 旗
何 手や けの 喜の 心 風
旅 爺 屋 上 けの けの けの 黄
あ けの けの けの けの 信
舟 枝の けの 母 けの けの 信
と けの けの けの けの けの
持 旗の 一 百 座 子 けの けの
あ 舟 けの けの けの けの けの
舟 けの けの けの けの けの 市

寄書 物をよきと 性子の旅
之おろくみ 去しとく 尼寺の端
殊 持まよし 祖母の信 こと
言ぬ 花の木 けの 一 旗
何 手や けの 喜の 心 風
旅 爺 屋 上 けの けの けの 黄
あ けの けの けの けの 信
舟 枝の けの 母 けの けの 信
と けの けの けの けの けの
持 旗の 一 百 座 子 けの けの
あ 舟 けの けの けの けの けの
舟 けの けの けの けの けの 市

舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信
舟の音 けの けの けの けの 信

寄書 物をよきと 性子の旅
之おろくみ 去しとく 尼寺の端
殊 持まよし 祖母の信 こと
言ぬ 花の木 けの 一 旗
何 手や けの 喜の 心 風
旅 爺 屋 上 けの けの けの 黄
あ けの けの けの けの 信
舟 枝の けの 母 けの けの 信
と けの けの けの けの けの
持 旗の 一 百 座 子 けの けの
あ 舟 けの けの けの けの けの
舟 けの けの けの けの けの 市

山嶽をさすやあつきて
芳のうけやちを尺くさる花露
芒のうけやちを尺くさる花露
雪のふれや月を流す人との
露のいづれをかさる中橋
さびきる花さるははたふりけ
月影のさる花さるははたふりけ

山 嶽 芳 露 花 露 中 橋 月 影

松風より新酒をすらす松定が
月とくさるく石垣の上
河の門おひく麻の飛らえ

支考
松 定 月 石 垣 上 河 門 麻 飛 ら え

見しハ嶽名の籍を引す
せりともおわしすはつと
この山よりけむる かつ
藤おふつ草履の尻ハまねうま
床て天むきをこそしと刺
まひす梅枝の終をよま提て
空の舟の中をさる引のけ
仕合と久橋の舟ものうあん
あふけと餅のちされうつつ
せま（と）はなをさるははた
大工屋根屋の隅の隅
月のあつてけむる

雪 嶽 惟 然 車 袋 望 翠 房 花 露 中 橋 月 影

白の海は昔の白ゆきやう
まはるるを望んで同し秋
親と子字をいし秋
月影も又く之を責む
かゝる藤木の枝はひや
咲いたる花もさきさき
跡寺もいけてはたふ椽
木と鴉のけしめめ
内裏の菊も子供も
是湯の門のさし入
一里の舟と板のす
ふはる密柑の色の
花も

花も 紫 紅 紫 紅 紫 紅 紫 紅 紫 紅

なみれしうらな 畑の家
母方のくまを
嵐の霧を 花
侍穿の髪を
さくねの
お念と
せんとの
あつた
たけ
か減り
花

花 紫 紅 紫 紅 紫 紅 紫 紅 紫 紅

こぼれて生る 柀のせけし
約みの露の湯たぐいをも尾の業
飼ハ吹中子牛のほやつく
枯もさすふらふらとあふく捕の枝
月見のつゆと造化せし
智もゆさしとす秋の風
候の小家をもさるきり
懐子もあしとさるきり
いそふの齊の白豆腐もは
も陰のさすくぬく花の枝
根もつらふらふらとすのつ

袋 籠 考 然 然 考 袋 籠 考 袋 籠 考

菘ののまれさるおのねあか
なを空うれと勢ある
水かき池の中うそありて
藻竹よりさ茶をいさく
難うあくるとやうさるの月
通うのあさる兄在立の秋
冬は竹一帯とさる鮎の魚
屋の柄かきさるさるさる
舞うのまらしとさる物
中ふらふらとさる吉方
節りのまらしとさる振

沽園 菘 支考 惟然 菘 然考 菘 然考 菘 然考 菘 然考

山とく羽折るるきき君の
幸あしれ喜葉の枯の概楓
山子門あつるの月
神農さしけの人のうけ也
多 際光の頃のふい
足て通る紀三折の花の咲
荷持の又西子来およ
家多し縁を大るう
怪味の他受ハ度屋き
喧嘩のさごとむさくさく
大切れ々うたりるる
陸

然者翁然者翁然者翁然者翁然者

きく記るけー中の花
未のほくの糸掛ハえれ出
真の喜並ハ近季の他
酒うと春のやすふ月尺
赤難既を 庭の正 向
ささうらぬ始のるる
病汗のささるる約方の
多んを流るる起すねの
大工はくいのねくまゆ
米搗よりあふしし
かろあし市れ中を押
此何く 孫生ハ花の季
あく

然者翁然者翁然者翁然者翁然者

野のゆきゆきのまにゆけぬ

考

松茸や初子ちよ山の子

惟然

雨子踵手の志るふ秋の

去芳

おとろく啼す耳の月曇り

旅離

すこ入人あふ次の居ぬる

翁

とこひまらさきそこし互ち

然

このさこみり夜来して啼

翁

冬けぬ熟柿をとむすく積

翁

至して廻りし佇めの秋後

然

庭まふくして古風の来さく

然

肉茂むて来り酒のとれ際

翁

ちりつむる又と痛めり政をけ

翁

と骨の冷い湯芽生のあ香

翁

そのめらふとくをれし一之

翁

尺すのほくれば海魚籠の内

翁

ろくろはくはくく丸のか

翁

魂を引とる）聲の上ゆり

翁

行ふしの市にきてを底る長谷川

翁

畦止亭のし月を尺竹る

翁

外うすしあふ香の月尺くれ

翁

秋のゆきゆきに魚荷連る

畦止

幼き子に宿き月子心宿ぬきよ
 半造他しかり陰子たる
 幸なくくを野立ふも物くも
 地よ志ぬるほど時向ふくも
 唯のほかりをそて一羽 籠
 ありぬきあひの持さけては
 舟入を所わし位手より三舟の程
 栂と勢をも浮山よりなく
 人しの尻も尻くぬ花差
 咀のくつきを後子くつり

菊月廿二日に車廂亭

止 壺 花 流 菊 是 流 考 壺 然

秋の夜をそあふのしるる喚可菊
 月よりの作はハ菊葉を子ノ花
 西の山にたかえたるふ層峰して
 走、ゆるる牛のよくくこくこ
 男の姿をかんまて草ふ志性光
 小袖をわしるる病いら大音
 使やうあやをそくしてあはれ
 かへてと醫者の尺そのれよる
 栂のまゝ愈ししの栂きくし
 寒くおの舟田の 栂
 地より尾谷くけえきりり
 すくきくふくハ砂ハ尺く色まひ

菊 車廂 酒壺 游力 泖竹 惟然 支考 菊 壺 力 考

花の末ぬ夜ハ有償り百の換
雨雲の月の不ろき川 筋
火くもーく業所を言つ後々
七終やしてハよろしに際ふ大
兄さうは花鞠の苗花やう手
小玉形あ〜ふを秋のま

然堂力翁盾

所思

此そやけ人きーす秋のくれ
虫のた〜けの木〜く〜の草
月〜くむ草葉の〜むれ〜の結て
ちんきふ家をむ〜し〜あ〜む

遊力 支那 泥足

了春合羽折を入し有様
酒〜い〜の〜の〜の〜の〜の〜
氏身ぬきぬきの〜き〜か〜
唄の〜ぬ〜の〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜
娘よとまの〜の〜の〜の〜
娘子の餅の〜の〜の〜の〜
は〜の〜の〜の〜の〜の〜
かくきふ草の〜の〜の〜
は〜の〜の〜の〜の〜の〜
地籠の〜の〜の〜の〜の〜
仕の〜の〜の〜の〜の〜
塩飽の〜の〜の〜の〜の〜

飄竹 車扇 酒壺 帷止 惟然 氣梅 是 翁 扇 考 竹 然

つとと色づくくくふきの茎
葉のくくくくくくくくくく
葉のくくくくくくくくくく
上らの橋の葉のくくくく
植田の中を勢のくくくく
小かたひくくくくくくく
行の仕かーのくくくく
有勢もくくくくくくく
杖一本とそめぬさー！
形勢のくくくくくくく
むくくくくくくくく

壺 女 翁 中 壺 女 翁 竹 然 考 女 壺

餅ちきくくくくくくく
女ぬきくくくくくくく
田の水のくくくくくくく
木のさー木くくくく
伸り

考 女 壺 然

百葉中木の木くくくく
第くくくくくくくく
味くくくくくくくく
和くくくくくくくく
田橋くくくくくく

翁 浪化 古来 如舟 起 翁

業終ちりむしるのけや夕海に
雪のけゆく空陽花の花
出翠
翁

いあつりく歌うえの戸はくれ
さしけ境予のひる
翁
松鑑

清多むら海の小亭に秋立て
またれりるあふ秋ありし
翁
松鑑
又おむしる歌をき家のあ
松鑑
松鑑
松鑑
松鑑

杉しやむんさきりる杉の春
雪は

故き
翁
松鑑
翁

秋風を吹れて希一海あり
伏て去りけし綿の穂の
翁
松鑑
又うたて秋風の里をささりて
翁

年歴不知

松松すすらひゆけりるみまきか
孫おもしるくさゆらたそり松
翁
長心朋折も四五事のくち
翁
吹されて法ハ彌山月まろく
千那

八三三

松千代 柀 くのほろろさの収
いし 桐千代 坊をきよめさるる
阿の 堂とみし 八の 何
林の 岩より 題心を 印して
天より 糸と 地より じんあ

末 六 翁 良 政

何れも 紫吹 風も ぬえれと
鳥の 又 千 生 指 千 以

松風

翁

いり ころ あり あり して 付 あり あり
ころ ころ ころ あり あり あり あり あり
ふの 鬼 大 あり あり あり あり あり

翁

かれ 果て ころ ころ あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり

鳥 山 や 柳 あり あり あり あり あり
言 上 千 破 ころ ころ あり あり あり

青の 万 あり あり あり あり あり あり
年 あり あり あり あり あり あり あり あり

望 あり あり あり あり あり あり あり あり
炭 ころ ころ ころ 小 倍 あり あり あり

八

きのきぬこの海きハはく
世のくみいさく位の海平呼れ

しんまふみはふくくし
尾のくくくくみ海の横

海のくく火くくくくく
くぬの百玉のお線のおくく

ひくくくくくくく
二河海く西く破のきくく

板の風ハ豆かく吹
きくく板の横おハひくく

小信ふくくハくくく
新解の横くくくくく

象意ハ色紙も持る
字目ハあきくくくく

すくくく切て通すくく
海のおくくくく入海の限

後おとしらく梅の嶺とく
更科の里の破をゆめりり
端居くられしゆきみ石竹
なありしきりしと物と心
新うきしのかひあくとあれ
際ふりしうく猫の言白
人しるぬ中を火燈をもよれ合
ゆきの日氣折指くぬし

梅よりそ後の歩走人こま
石よりしゆふ小館をより分て
蝶掃のそ月大くそあむし
向ふの人と中をきりり
待つて人とにししけり
新なききふお折りききの陣うり
梅をこむりし市のゆきと
大和路へ入るをきりし花曇

心—きのうのうらハかゝる 秋之
きのうのうらハ梅の並みゆく

俳諧一葉集附合之部 終



四

ハ

